

7 アートマネジメント アイヌの音楽 (に関する企画を考える)

1 講義の内容と本稿の執筆について

私の当日の講義では、芸術・文化と社会を結びつけるアートマネジメント業務について、アイヌ民族の音楽についての企画を考えるという想定でお話ししました。本稿はその文字起こしを整理したものです。当日の講義内容は、①企画する立場として必要な音楽文化の基礎知識の獲得とイメージ作りのこと、②現場とつながる方法として、機関や施設、観光地のこと、③私自身のフィールドワーク調査の経験について、④アイヌ音楽の特徴とその歴史的な変化について、⑤現在アイヌ音楽を実践する人たちについて、といった構成でお話ししました。文字起こしは20ページ以上になり、それを4ページにまとめるために、他でお話する機会のありそうな②～⑤については本稿では割愛し、冒頭部の話のみを掲載しました。なお、当日は多数の写真を使用しましたが、本稿では印刷上の都合により大半は文言のみとなっています。

2 音楽文化の基礎知識の獲得

さて、音楽に関する企画を考えるとき、ある音楽文化を紹介する立場として、皆さんは、その音楽文化そのものについてよく知っていること、できればかなり知り尽くしていることが理想的です。しかし、当然ながらその理解度は人によってそれぞれです。場合によっては、興味を持った勢いで企画を打ち立てたけれども、実はあまりよく知らなかったという場合もあるかもしれません。物事は理解が深まるほど、自分が知らないことに気づいたりします。知らなければ学ぶ必要がありますが、限られた時間の中で知識を吸収するためにはどうしたらよいか。

まずは調べましょう。関連書籍等を読みあさるのは基本ですが、手軽で便利なのはインターネッ

ト検索です。これは予備知識となります。インターネットは正しい情報も間違った情報も玉石混交で同様に並んでいます。おかしな情報に飛びついて大きな過ちを犯すこともあります。ほんとうに予備知識の予備知識くらいに留めておく気持ちが必要です。関連した書籍の情報は基本と言いましたが、出版されたものの中にもいろいろなものがあるので、どれを信用すべきか、迷うときはありますね。情報の選択というのは究極の問題でもあるので、間違いのない王道のようなものではありません。専門の研究者でさえ情報の選択で分かれる場合があります。しかし迷ってばかりでは先へ進めません。これはご自身の業務の全行程を通じて次第に見極めて行ければよいと考えるべきでしょう。

3 企画に必要なイメージ作り (フィールドに学ぶ)

そして次に現場に足を運ぶということが重要になるかと思います。現場、フィールドですけれども、これは本当に大事だと私は考えております。ただ企画の対象となる人たちに直接会いに行く、今回の場合はアイヌの人たちですね、もちろんそれは必要なことなので、段階を踏んで実行することでしょう。ただ、現地訪問はそれだけの意味ではないように思います。その文化の生まれ育った風土、これを体感するという意味もあります。ここではその話をしたいと思います。

私の場合は、アイヌの音楽を求めて、北海道各地に伝承者の方々を訪ね歩いたという経験があります。その訪ね歩く道すがら、車で北海道を、大地を走り回るわけですけれども、そこで風景から受ける影響というのはとても大きなものがあったと思います。心の深いところでのイメージ形成と

〈図1〉 撮影場所



いますか。土地の空気感というのは、私にとってはアイヌ文化の現風景に結びつく作用があったように思います。北海道を走っていると、関東育ちの私にとっては非常に新鮮な風景が視界にたくさん飛び込んできます。

昔の写真を出してみたので、見てみたいと思います。1991年11月19日と20日の2日間に撮った写真を、自分のアルバムから全部、ここに載せました（54葉使用、本稿では抜粋のみ）。全部見る必要はないですが、全体を流して見ると、当時の私の意識が垣間見えてきます。

2日間の行程を地図に赤くマークしました。屈斜路から釧路を周り、羅臼を経由して女満別空港から帰京、という行程です。

これ（写真1）は屈斜路湖の景色ですね。真ん中に白鳥がいたりして、こういうきれいな、あるいは雄大な景色というのは皆さんの北海道のイメージそのものかと思います。美しいところが多いですね。

1日目は釧路博物館に寄って資料用の写真を撮っています（現在は一般的には撮影禁止です）。

話の本筋には関係ない資料なのでどんどん飛ばしていきますね（スライド8枚32葉を提示）。

資料写真も撮ってはいますが、2日間で撮った



写真1 屈斜路湖



写真2 釧路のカモメ

写真の半分ぐらいは風景写真ですね（37葉をスライドで提示）。

これ（写真2）は、釧路の方かな。釧路から羅臼に向かう途中の浜ですね。この写真は自分の調査とはなんの関係もないのですが、カモメがあまりにも大勢いたので、こんな見たことない、ということでシャッターを切ってしまうのですね。そこに住んでいる人にとってはなんてことない風景かもしれませんが。

この写真（次ページ写真3）は人の家の屋根にまでこんなにカモメがいるのか、と面白くて撮っています。

何も無い風景も多数撮っていますね（次ページ写真4）。広さに驚くのですが、写真に切り取るとその広さは伝わりませんね。

これは、羅臼のヒカリゴケですね。そして車で行けるところまで行って、行き止まりで引き返しています。



写真3 屋根の上のカモメ



写真4 広大な光景



写真5 雲と光の風景

※この写真のみ講義当日は使用せず、後日追加した

〈譜1〉 チュプカワ カムイラン (アイヌの歌譜「カシポキ」)

「 」=65/uk

声域		レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
裏声 (A4)		チュ	フ		ム	イ		イ	フニ
地声 E4	レ								
地声 D4	ド	カ	ワ	カ	ラ			テ	カ
低い声 A3	ソ								

無声音

声域		レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
裏声 (A4)									
地声 E4	レ	レ	フ			タ	ン		
地声 D4	ド		ト	ウ	エ		ネ		ア
低い声 A3	ソ			サ	ム				マ

北海道を車で走っていると、雲間から放射状に出ている光を見ることがよくあります(写真5)。すごくきれいで、天使の階段とか、そういった呼び方が外国でもされていると聞いたことありますが、それを見た瞬間に、私にはチュプカワカムイランという歌が聞こえてきたのですね(譜1)。

チュプカワカムイラン、空から神様が降りてきて、アオダモという木の枝に止まった、私たちは岩山のそばでその長い息吹を聞いた、という意味の歌です。まるでその光のところからカムイ(神様)がすーっと下りてくるイメージです。この景色を見てから、私はこの歌を聴くたびにこの光と雲の風景を思い起こすようになりました。

音楽やその文化を風土と結びつける捉え方は、なかなか言葉に表して整理することは難しいかもしれません。自己の中の直感的な感覚で捉える部分があるからでしょう。ですが文化を有機的に理解するためのエッセンスがそういうところに潜

っていると考えています。

音楽を企画して何か表現するという行為の中でも、自分の中にイメージを育て、次第に豊かな理解を構築することが大切です。

景色や環境と共にもう一つ取り上げたいのが、そこに暮らす人々の気質というものでしょうか。その場所に伝わっている物事の捉え方、考え方が、人々の反応の仕方などに表れていると考えられます。これも文化だと思います。

これは羅臼の方の小さな港にいた若い漁師さんたちです。帰京する日にたまたま立ち寄り、お土産にできるものはないかなと思って話しかけてみたら、もう市場へ出荷した後で何も無いとのこと。でも自分用のカニがあるから、これあげるよと言って、とても大きなタラバガニをプレゼントされたのです。その辺でゆでてもらえと言うのでその辺のお宅でゆでてもらい、持ち帰りました。後日、返しにお茶を送りましたが、その場の雰

囲気として自然なやりとりではありましたが。思い返せば出会う人出会う人、人の良さに驚きます。

私は別の調査もあって、このとき2週間ぐらい北海道を回っていました。この数日前の土曜の夕方に、手持ちのお金が足りなくなってきました。まだスマホもコード決済もなく、ATMも普及していない時代、北海道の田舎には金融機関自体が寡少で、ガソリンスタンドも少ないです。まずガソリンを入れたところで手持ちは尽き、その後何十キロも離れた郵便局に向かったのですが、到着すると予想外の早い時間に閉まっていました。月曜までの2日間、ほぼ無一文。困りながら走っていたら「ライダーハウス宿泊無料」という看板が目に入り、一安心しました。ところがその先の屈斜路湖畔の土産物屋に入り、店のおばさんと話していると、言うことには、ライダーハウスは宿泊は無料でもストーブが有料だから、素泊まりなんてしたら凍死する、とのこと。そして、これでどこかに泊まりなさい、と初対面の私に1万円貸してくれました。もちろん次の年に返しに行きましたが、世知辛い東京の音楽業界で^{しのみ}錆を削ってきた私にとっては、なんだか人柄の良さに驚くばかりでした。この方はこのときたまたま知り合っただけで、その後大変懇意になったアイヌの方でしたが。

そのようなことが何かと重なり、人の気質と言いますか、時代背景もあるのかもしれないけれど、全体に北海道の人はおおらかで優しいというイメージが私にはあります。それから話が上手という印象もあります。話好きな人が多いですし、お笑い芸の盛んな大阪など、関西の人の話上手とはまたちょっと違う話のうまさというのでしょうか。関西の人がひねった話がうまいとすれば、ストレートで素朴な話がうまいという印象があります。直接的なイメージをまっすぐに上手に伝える人が多い。

人の話し方のイメージなどは、なんでもないことのように感じて、後から、アイヌ文化の中に近い要素があると結びついたりします。アイヌの美德の一つにパエトクというのがあって、話し上手な

ことを言うのですけれども、言葉を大切にするとアイヌ文化の特徴とイメージが重なっていきます。風景や気質といったもののイメージは自分の中に蓄積されて、ずっと後になってから、私自身がアイヌ文化を学び理解する基盤に結びついていると気づいたりするのですね。

音楽には演者の表現、それを取り巻く音楽形態や楽器、背景となる文化など、いくつかの層があります。漠然としたイメージというものは音楽の企画には直接関係ない話のようでいて、じつは芸術あるいは芸能や文化、音楽という表現の本質には、風土その他が深く関わっています。環境と、そこに暮らす人々と、そうして彼らが作り出す文化ということですね。文化というのは一人の人が全てを理解できるものではなく、決まった形があるものでもありません。それを担うのは文化の伝承者だけではなく、周辺の人、研究者や企画者も含めてその文化に関わる全ての人です。音楽の企画者にも文化伝承に関わる責任があります。舞台やステージを作る上でイメージ作りは本当に大切です。そのイメージをどこで作るかといえば、結果として現れている音楽の形だけではなく、効率よく担当者と同様面談するだけでなく、まずはその土地を踏んでみることは、ぜひお勧めしたいと思うのですね。

(千葉伸彦)